

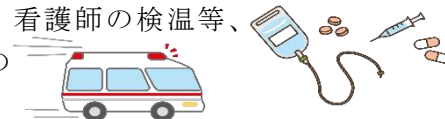


■ 私のコロナ感染記 ■

2021年(令和3年)元旦の朝に不定愁訴を感じながら、いつものことと思いきにも留めず分厚い朝刊に目を通してから年賀状を見て未だ続いている旧交に想いを馳せて過ごしました。夕方になって体温計を見たところ40度に迫る数値に驚き、夕食もそこそこに済ませ早々と就寝しました。翌朝再度検温すると39度の熱がありました。寝込むような状態ではないと思っていました。一方、持病(重症筋無力症—難病のひとつ)の主治医から常々指摘されていた感染症の罹患を避けるようにとの注意を思い出しました。正月三が日なのでどこのクリニックも休診でした。以前に歯医者で貰った抗生剤があることを思い出して服用しました。これは一日1回2錠三日間服用すれば一週間効果が持続するというものです。熱は正午に37度になりましたが、気になるのでケアマネジャー(介護保険の担当者)に状況を報告して相談しました。

彼は電話相談できる医療機関を紹介してくれ、区役所の休日診療所なら予約なしで受診できると教えてくれました。診療所では、コロナ感染チェックのための問診と検温が済むまで屋外の寒風に晒されながら待機させられました。医師の診断は「単なる風邪でしょう、二日分の薬を出します、4日(月曜日)に掛かり付けの医院で受診してください、念のためPCR検査を希望しますか」という内容でした。出来れば受けてみたいと告げると、検査を受けると相当の期間拘束されますよと言うので検査は辞退しました。

1月4日の朝に発熱がぶり返し初めて強い自覚症状が出る中で息子を作業所に送り出しましたが、耐えきれず自分で救急車の出動を電話で要請しました。救急隊員が来たときには朝食を取っていないのに激しく嘔吐し、抱き抱えられて救急車に乗りL病院の救急病棟に入院しました。早速、コロナ感染の抗原定量検査、肺臓のCT検査、血液検査を受けました。一時間後に抗原定量検査の結果が出て陽性と診断されました。他の検査と合わせてコロナウイルス感染中と診断されました。ここから医療スタッフの態度が一変するだけで菌扱いのような厳重な環境に移行します。出入り口が三重のビニールカバーで封鎖された個室の臨時病室、部屋の出入りは医療関係者のみが許可され入室の際はテレビで何回も見た感染防護服の着用という物々しい空気です。医師の診察、職員の食事搬入出、薬剤師の薬供給、看護師の検温等、そのたびに緊張感が漂いました。閉そく感と合わせてこの環境の中で一週間余り滞在するのかと苦痛に感じました。



1月5日の朝食後に職員が来室し午後から転院するための準備をするから荷物をまとめて置いて欲しいと連絡がありました。コロナ感染に特化した病院から受け入れ許可の連絡が入ったので転院になります、その方が患者さんにもよいでしょう、その病院は相模原市のT病院です、という説明でした。転院は予想もしないことでしたので驚きと不安を感じました。午後2時半ごろに救急車に乗せられて遠路遥々川崎市のL病院から相模原市のT病院へ移動しました。

到着した所はT病院という現在は廃止になっている病院でした。救急隊員と共に受入れ案内者について行くと広く大きな病院の施設は案内看板も含めて立派なものでしたが殆んど行き交う人もなく静まり返っていました。目的の病棟は3階にあり、そこには通常の病棟の風景があ

りました。ナース・ステーションには多くの看護師さんが詰めており、病室にも患者がいましたが、かなりの病室は準備中(空室)でした。患者さんは、すべてコロナ感染者で病室も3人の相部屋でした。しかし、なによりも驚いたことには、この病棟ではすべての医療関係者が普通の病院制服を着用しており、重装備の感染防護服などは一人として着用していません。ナース・ステーションはオープンカウンター方式で扉もなく、待合室の窓も解放型の大きなガラス張りで廊下との仕切りはありません。転院の不安は一気に解消して明るい空気に感激しました。

病室に入ると落ち着く間もなく、医師による採血およびPCR検査の組織採取が始まり、看護師による入院案内説明、事務職員による入院手続き、等が一時に集中して慌ただしい思いをしました。直後に胸部のレントゲン撮影、CT検査があり、やっと一段落しました。その日はL病院で移転準備が昼前から始まり昼食がカットされていたことに気づき病室担当の看護師さんに相談すると、検査等で食事抜きの患者のために用意される検査後の捕食用のパンを病室へ持って来てくれました。すっかり安心して、重装備をしなくて業務をされていて怖くありませんか、そっと尋ねてみました。誰が感染しても不思議でないコロナですからねと涼しい表情で応じてくれました。改めて感謝し感激しました。



1月6日午前の担当医による回診のときに、昨日のPCR検査の結果は陽性であることが告げられ、抗原定量検査結果から予想どおりで驚いてはいない、まだ熱があるので解熱剤を処方します、という診断でした。午後になると、転院前の病院で点滴を受けていた注射針はその必要がないので抜いて貰い、解熱剤の効果がでて熱も下がり安定しました。以後は経過観察のみで退院する1月14日まで不快な症状は皆無でした。その間、3回シャワーを浴びましたが、体温・血圧等に全く異常はありませんでした。食事は質素なものでしたが、計算された栄養価なので安心して戴きました。その結果、2キログラム体重が減少しダイエットも難く達成されました。

今回のコロナ感染入院では、当初持病のある高齢者は重症化し易いという懸念があり、小生の場合まさに悪条件に該当していました。法定難病のひとつである「重症筋無力症」であり年齢は「80歳という高齢」です。何故か軽症に終始したことは不幸中の幸いです。いわゆる感染後遺症も今のところありません。重症化する場合、主な原因として指摘されている二つの要因として、重い肺炎を併発すること、サイトカイン・ストームといわれる自己免疫の暴走により様々な組織が重いダメージを受けること、があります。小生の場合持病の主治医から感染症に罹ると筋無力症は増悪するから、人混みは避ける、マスクを使用する、手をよく洗う、最悪の場合クリーゼという呼吸器の筋肉の働きが阻害される可能性があるので感染症に罹ったら迷わず救急で入院せよ、という注意を普段から守っていたこと、持病が自己免疫疾患のひとつであるため免疫抑制剤を常用していること、さらに今回は1月2日から4日まで抗生剤を使用してその効果が一週間続いていたことで重い肺炎が避けられたと考えられること、などが幸いしたのではないかと思います。これらは軽症に終わるために必要な条件であると考えられることは出来ませんが、決して十分な条件であるとは考えられません。その意味では、



■ 『障害のある子の「親なきあと」を読んで』 ■

「鳥山東風の会 第9回講演会」で講師としてお招きした、渡部伸先生の本をご紹介します。

渡部先生は行政書士、社会保険労務士を始め多くの肩書きをお持ちですが、「親なきあと」相談室の主催者、そして障害のある娘さんの親でもあります。娘さんの将来の不安を相談する場所がないことから、自ら「親なきあと相談室」を立ち上げ、今ではその活動が全国に広がっています。

障害のある子の親なら誰もが向き合わなければならない「親がなくなった後、子はどうなるのか」の問題。親がなくなった後、子の生活はどうなるのか、病気になったら、住む場所は、お金は……。

将来への不安に対し、何ができるのか、どう考えればいいのか。漠然とした不安に対する取り組み方がこの本で紹介されています。

『障害のある子の「親なきあと」』（主婦の友社）の内容ですが「親なきあと」の課題は、

- ①お金のこと
- ②生活の場所
- ③日常生活の支援



の3つに集約され①では障害基礎年金や成年後見制度等②では障害者支援施設やグループホームを③では障害者福祉サービスの制度が詳しく書かれています。

漠然とした不安というのは、いわゆる何から手を付ければいいのか分からない、混乱した状態です。まずはそれらを「見える化」させ「具体的な課題」にし、制度の知識や情報などを知る。前向きに取り組むことで、不安が軽くなると解説します。

そして「社会との接点を持つ」ことも大切。

家族会や相談室、地域でのつながり。社会と接点があれば困った時、役立つ情報や支援を得られたり、話すことで「なんとかなる」と思えることが大事だと、渡部先生は言います。

もう一冊、こちらは渡部先生が監修された本をご紹介します。

『障害のある子が将来にわたって受けられるサービスのすべて』（自由国民社）。この本は制度の辞書のような本で、6つの章に分けて説明しています。

- 第1章 障害のある子が受ける保育・教育
- 第2章 わが子が働く年齢になったらどんなサービスがあるか？
- 第3章 障害者手帳によるサービスの種類と受け方
- 第4章 生活面で利用したい各種のサービス
- 第5章 20歳になったときの障害年金の受け方
- 第6章 親が亡くなったあとわが子はどうなるか？



ぱっと開いてすぐわかる見開きの構成で、巻末には索引があり、知りたいキーワードがあれば内容に辿りつけます。イラストを多く使った類書『まんがと図解でわかる障害のある子の将来のお金と生活』（渡部伸著 自由国民社）も出ていますので文字の多い本が苦手な方は、こちらから入るのもおすすめです。

子の将来に向けて親は何ができるのか。『障害のある子の「親なきあと」』にも『障害のある子が将来にわたって受けられるサービスのすべて』にも、子の将来に役立つ知識や情報が詰まっています。

私も障害のある息子の親。息子の先の見通せなさや「親なきあと」の問題と、不安が尽きることはありません。歳を取ると親子のライフステージも変わり、新たな問題が出てくるもの。だからこそ「なんとかなる」と前向きな気持ちになれる本は心強い味方です。

親が元気だと子ども元気にように、親の心の安定は子の心の安定に繋がります。心の安定につながる情報や知識は一つでも多く持ちたいものです。(R.I)



「烏山東風の会」今後のスケジュール

「烏山東風の会」では、新型コロナ対策対応の為、十分な活動が出来ていません。
世話人会の見学・参加、ご意見等は下記にご連絡ください

- 携帯電話 080-3009-1200
- メールアドレス kochinokai@au.com

各種、お問い合わせ、ご相談もお受けしております。



「烏山東風の会」ホームページでも、情報を発信しています。

- 「烏山東風の会」ホームページアドレス <https://www.kochinokai.com/>

■ 会費振込のお願い ■

この会報誌は「烏山東風の会」に入会している方にお配りしています。4月より新しい年度になりますので、新年度の会費につきまして1年分6000円、または半年分3000円を、以下のいずれかの銀行口座にお振り込みいただくようお願い申し上げます。

- ① 三菱UFJ銀行 永福町支店 (普) 0106550
「烏山東風の会 会計 黒田邦夫」
- ② ゆうちょ銀行 記号・番号：10000-29576521 「烏山東風の会」
お問い合わせ：黒田邦夫 090-4173-7604

デイケア写真館

桜に代わって、ツツジが歩道を彩るようになり、時には初夏を思わせる季節の変わり目を皆様どのようにお過ごしでしょうか？

緊急事態宣言解除から約1カ月、新型コロナウイルス新規感染者が再び増加する中で新年度を迎え、デイケアでは、防災のためのプログラムが行われました。

3月19日には、「リハビリテーションセンターのラウンジに置かれた冷蔵庫から出火した」という想定で避難訓練が実施され、スタッフの指示に従って、正面玄関から駐車場を通り、参加者全員が院内にある空き地に向かいました。

訓練ということで緊張感に欠け、迅速な避難という点では課題が残るものの、訓練後の振り返りでは活発に意見が交わされ、参加者の防災への意識が高まりました。

今年は東日本大震災発生から10年の節目に新型コロナウイルス感染拡大が重なり、防災に対する意識を高めていかなければいけない時期だと感じました。(M.T)

